

多摩細胞診研究会会報

編集責任者/笹井 伸哉（国家公務員共済組合連合会立川病院）

発行責任者/小松 彦太郎（独立行政法人 国立病院機構中信松本病院）

長谷部 鏡子技師追悼特集号！

長谷部鏡子さん安らかに

多摩細胞診研究会

会長 小松彦太郎



小松先生が勤務されていた草津の病院へ多摩細胞診研究会仲間と。両サイドは小松先生と奥様

中央が長谷部さん



窓から見える北アルプスの白い峰々の雪も厳しさを減じ、肌に受ける風も暖かさを感じられる様になりました。4月22日、長谷部さんが亡くなられて1年になろうとしています。お母さん、妹さんにとっては本当に辛い1年間ではなかったでしょうか。

長谷部さんからのメールを改めて読み直しています。BMLに入社後、細胞診の資格を取られ、上野さんの右腕としてがんばっていました。多摩細胞診研究会の重要なメンバーで、研究会はもちろん課外活動でもよく世話をしていただきました。ゴルフもがんばっておられ、景品は彼女のおかげで楽しみでした。笑顔が印象的で、いつも前向きな態度でした。主任に昇進することも決まっていた矢先に、大腸癌が発見されました。手術、化学療法にも耐えて、一時は治癒したと思われていました。私が、草津に勤務していた時には、バーベキュー、うどん打ち（森さんの芸）、いわな釣り（長田さんの太公望）など、細胞診の仲間は長谷部さんと一緒に楽しむことが出来ました。しかし、再発し、卵巣、肺の手術、脳への照射と長い闘病生活でした。一緒にゴルフをやる日があることを楽しみにしていました。コースには何回か見学に見えられ、一緒にカートに乗って回ったこともありました。馬は彼女によくしてやられました。しかし、肺の手術後には脳梗塞になり手足の運動が不自由になってしまいました。一時は、寝たきりを覚悟しなければならぬと言われていましたが、東京病院に入院後持ち前のねばり強さから歩行も出来るようになりました。悪い左手でみかんが掴めたこと、車いす卒業の日のことなど喜びをメールで送ってきてくれました。細胞診の勉強会にもよ

く顔を出してくれました。また、蔵王スキー場の祭りにも細胞診、東京病院の仲間と花火などのイベントを観ることができました。骨への転移で再び歩行が困難になり、痛みも強くなり、放射線療法のため東京病院に再入院しました。彼女は一般病棟を希望し、再起を願っていました。最後の最後まで、病気との闘いを諦めず前向きな態度でした。緩和ケア病棟に3月9日移りました。最後に頼みの綱にしていた免疫療法も適応外といわれ、失意と無念さはいかばかりだったでしょうか。まだまだやり残したことが沢山あったと思います。緩和ケア病棟での日々は一見穏やかに見えたことが辛かったらと思います。

多摩細胞診研究会は、平成6年（1994年）1月29日に第一回を森さんが主催で昭和病院で開催してから、今回が24回、通算で12年になります。前身の東京病院の勉強会は、昭和57年（1982年）8月からですので24年になります。ここまでこの研究会をやったのも長谷部さんの功績は大きかったと思います。これからも多くの細胞診の仲間のよりどころとしてこの研究会を維持発展させていきたいと考えています。長谷部さん、これからも我々の活動を見守って下さい。花小金井のふれあいパークのお墓の銘は、“想い”でした。長谷部さんの“想い”を大切にしていきたいと思います。また、形見にいただいた“鏡”も大切にしたいと思います。安らかに眠り下さい。ご冥福をお祈りします。



PCL羽山先生と細胞学会出席

(2000,11,18 大宮ソニックシティ)

— 長谷部さんありがとう —

東京セントラルパソロジーラボラトリー

上野 喜三郎

長谷部さんが亡くなってから早1年を迎えようとしています。まだまだ実感が沸いてこないのは私だけではないと思います。私にとっては職場での同僚として、また多摩細胞診研究会では同じ会員として常に行動を一緒にしてきた仲間です。

彼女と最初に出会ったのは私が元の職場（BML）に就職した1年後ですので約18年前になります。その前の年の忘年会で彼女が実習生としてお世話になった日赤医療センターの技師の方から“実習生で優秀な子がいるので来年新卒社員として採用してもらえないか”とのことでした。その時は私も酔った勢いもあり調子よく“わかりました”と言ったそうなのですが、その後すっかり忘れていました。年明けてしばらく経ってから再度、日赤の方から“長谷部さんの件はどうになりましたか？”と聞かれて何のことが解らないでいると、近くにいた同僚から忘年会の席で“解った！！”と言っていましたよ。と言われやっと思い出しました。それから人事部にかけ合ってどうにか採用まで漕ぎ着くことができました。確か、初めて高円寺のラボに来られた時はお母さんもご一緒だったと思います。当時はお母さんもまだまだお若くて、そっくりな顔をしていたのが印象的でした。入社後は独学で細胞診を勉強し、細胞検査士の資格を取得し持ち前のバイタリティーで常に職場のリーダー格として同僚、後輩を引っ張ってきたと思います。私も当時何度か“課長！だめじゃないですか！！”と叱られたことを思い出します。そのときは“くそ！生意気な奴め”と怒りが込み上げてくるのですが、彼女の言っていることは間違っていないく何時も反省させられることばかりでした。彼女は細胞診の仕事だけではなく、精度管理の面でも精力的に関与し、地方ラボを立ち上げる際は現地に出向し設立認可を得るために一生懸命活躍をされました。特に札幌にはラボ立ち上げと指導を兼ね約半年間出向してもらいました。彼女は馬が好きで休みの日は一人で電車に乗って浦河の牧場までよく行ったそうです。札幌から戻ってくる際に私も現地に行き、帰る途中のサッポロビール園でジンギスカンとビールをたくさん飲んだことを思い出されます。

多摩細胞診研究会にはいつごろから参加していたのかは記憶にないのですが、良い仲間恵まれいつも楽しみに参加していたと思います。多摩細胞診研究会のメンバーを中心に定期的にゴルフコンペが行われていますが、彼女も刺激を受けゴルフの練習をし、いつのまにか常連のメンバーになっていました。負けん気の強さもあり徐々に腕前を上げてこれからという時に病魔に襲われました。何度か手術を繰り返しながらも彼女らしい気遣いから周りの人達には決して弱音を吐くことはなく、いつも前向きな姿を私たちに与えてくれました。当然、彼女が一番病気のことを理解していたと思います。もし、自分が同じ状態になったら彼女のよう行動が取れるかと考えるととても自信がありません。

人生いつかは幕を閉じる日がくるわけですが、最後はこの多摩細胞診研究会代表の小松先生がおられた東京病院に入院され、蛇沢先生はじめ病理のスタッフがいつも身近にいるという安心感があったと思います。それがせめてもの慰めになっています。



存在感のある人

公立昭和病院検査科

森 一磨

ドライブ旅行、学会参加、研修会参加、スキーツアー、ゴルフ、細胞診仲間の新年会などなど、そこには必ず長谷部ちゃんが居た。そこには必ず賑やかなおしゃべりや笑いがあった。いつも楽しい空気が流れていた。細胞診の研修会や勉強会において、彼女に発言を求めるとすばらしく切れのいい模範解答が帰ってくる。

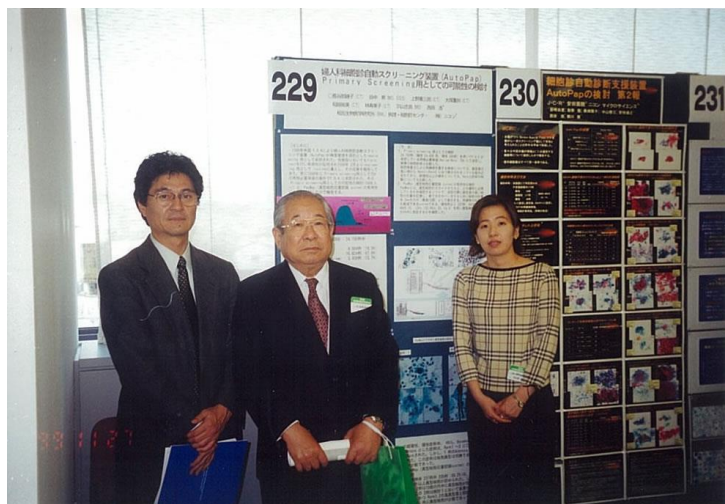
周りのみんなを頷かせる。そうすると勉強会も俄然活気づくことがしばしばあった。それと同時に会場がとたんに和んだ雰囲気になるのである。なんとも不思議な力を持った人だ。

小松先生が草津の療養所病院に就任していた頃、よくみんなで泊りがけで遊びに行ったものだ。帰り際に必ず寄っていく饅頭屋がある。ここは彼女が絶対的にこだわっているお店でもある。黒砂糖を使った温泉饅頭でたしかに旨い。甘過ぎずほのかな黒砂糖の香りがたまらない。甘いものが苦手な私もこれならいける。お店のおばちゃんが惜しげもなく試食させてくれるのもうれしい。

多摩細胞診ゴルフコンペが始まって間もない頃、長谷部ちゃんと同じ組で回った時、われわれ男性三人はパー3のショートホールで全員グリーンを外したが、彼女だけがナイスオン、彼女が飛び上がって喜んだ顔は今でも忘れない。まるで小さい子供の天使の顔である。彼女が闘病中は、本来僕らが励まされなければならないはずだが、いつのまにか彼女に励まされている僕らが居ることに気づく。子供っぽいお茶目な顔を持っている反面、“姉ご肌”の人柄も持ち合わせている人だった。彼女は病気と真正面から向き合って、決して後ろを見ず、ひたすら未来だけを見つめていた。これほど前向きな人もそうそう居まい。われわれに大きな勇気を残していった。

長谷部ちゃんは僕らに有り余るほどの思い出を残してくれた。たくさんたくさん残していった。目を閉じて彼女のことを思い出すと、いつもにこやかな彼女が居て、まわりには大勢の人たちが居る。その中心にいる彼女はたしかに存在感があった(情熱と輝きのあるひまわりの花の様な人だった)。

長谷部ちゃんはほんとうに天使になったが、われわれの心の中にいつまでも住み着いているようだ。どうぞ安らかに眠って下さい。



細胞学会で示説演題発表

田中 昇先生とご一緒に緊張気味

長谷部さんを偲んで

東京セントラルパソロジーラボラトリー

薄田 正

謹んで長谷部さんのご霊前に申し上げます。手術から回復され、平成 15 年 3 月 29 日に蓼科の BML 保養所で開催された第 18 回多摩細胞診研究会では一見なにもなかったような姿で、進行役や受付をやっていました。少しふくよかになったようなので「太ったね」と聞いたら「そう痩せなければ」と普通の女の子らしい言葉が返ってきました。そんなあなたが永眠されたという訃報に接して、あまりにも急ぎ足の旅立ちを残念に思います。思えば細胞診の学会の懇親会などで、お会いする機会が多かったと思います。私はあなたのことをいつもマリリンモンローと呼んでいました。それは顔立ちや髪型などなんとなく似ていたからです。そのぐらい魅力的な女性だったのです。

皆に慕われ、だれよりも活発で明るく責任感も強く努力家でした。職場では常にリーダーとして、細胞診自動化装置の運営など責任者として立派に仕事をこなし、これから力を発揮する矢先だっただけにその口惜しさ、苦しさはいかかなものだったか、さぞ残念無念だったでしょう。まだこれからやりたい事が沢山あったに違いありません。

長谷部さんの前向きな性格そして天性の明るさ、マリリンモンローに似た人、私は忘れる事はできません。どうして長谷部さんが若くしてこんな不幸な目に会わなければいけなかったのか。無常の風は冷たすぎる。今はご冥福をお祈りするしかない。



長谷部鏡子さんとの思い出

(株) サイト・イメージング

藤山 淳三

今年も 4 月に入り桜が開花し始め町全体が明るく彩られてきました。朝の駅までの道のり、ふと桜に目がいき感慨にひたることがあります。昨年の 4 月初旬、国立療養所東京病院へ長谷部さんのお見舞いに行った時のことでしたが、長谷部さんの病室の窓の外にはきれいな桜の木がありました。『もうすぐお花見をするの』とうれしそうな笑顔を浮かべて話してくれたことが思い出されます。時が経つのは早いものであれからもう 1 年が過ぎようとしています。

長谷部さんと私は 8 年ほど前からの付き合いで、特に多摩細胞診研究会が発足してからというもの、共に学び共に遊びと公私に渡ってお付き合いさせて頂きました。でも私との付き合いはもっぱら後者だったように思います。私が複十字病院に勤務していたころは毎年 4 月には近くの公園で花見をしたり、休日には所沢にある航空公園へ花見をしに行ったりもしました。そんな時いつも長谷部さんは中心人物で彼女なしでは会は成り立たないほどでした。また彼女が力を入れていたものにゴルフがありました。持前の根性で見る見るうちに上達し、多摩細胞診ゴルフコンペにも参加し好成績を残すほどでした。ご存知かもしれませんが長谷部さんは 3 回目の手術の後遺症で左半身に障害がでてしまいました。当初歩くのもどうかと言う話でしたが見事に克服し、再びゴルフができるかなというところまで回復しました。本当に彼女には驚かされるばかりでした。

私は前職を退職して1年程 PCL Japan にお世話になったことがありました。恥ずかしい話ですが、前職は呼吸器系の病院だったこともあり、当時の私の婦人科に関する知識は細胞検査士の資格を取った 91 年を全盛とし、下降の一途をたどっていたので皆無に等しい状況でした。それを知った長谷部さんは私の先生となり一生懸命に婦人科の指導をしてくれました。そのおかげで現在どれほど役に立っているか計り知れないほどです。また現職についてからは仕事面での付き合いもでてきて、いろいろと指導して頂きました。彼女についてわかったことは根っからの勉強好き・宴会好き・世話好きそして仕事好きだったことです。

私が長谷部さんと付き合いの会った大半の時期は闘病生活をしていた訳ですが、その間自分の病気のことなど全く表に出さず、いつも元気に振る舞い反対に私自身どれほど勇気づけられたかわかりません。きっと今頃天国から『何を言ってるの』と笑っているかもしれませんが。でも本当にいつもそうでした。どんなに治療が苦しくても弱音を吐かず、常に前向きに病気と闘っていました。生きるために。

今年の桜は後わずかで終わりです。でもまた来年もすてきな桜がみられるでしょう。それを楽しみに1年待ちましょう。長谷部さんも待ち望んでいると思います。みんなと一緒に。









第 23 回多摩細胞診研究会プログラム

故 長谷部鏡子技師 追悼会

開催日 平成 16 年 10 月 1 日 (土)

開催地 公立昭和病院講堂

教育講演

座長 上野喜三郎

(東京セントラルパソロジーラボラトリー)

『肺癌の細胞診』

Micropapillary LCNEC enteric type を中心に最近の研究から

癌研究会有明病院

佐藤 之俊 先生

――症例検討――

座長 藤山 淳三

(㈱サイトイメージング)

症例 1

「術中細胞診」

公立阿伎留病院 診療部 臨床検査科

涌井 清隆

症例；62 歳、女性。

現病歴；左上腹部に有痛性の腹部腫瘍を自覚し、外科外来を受診した。

既往歴；約 10 年前に当院産婦人科において卵巣腫瘍により子宮付属器切除術を施行された。

術中所見；腫瘍は約 5cm の大きさと腹部大動脈に接するように認められた。

細胞診所見；腫瘍は充実性で断面は著明な壊死と出血が認められた。術中捺印細胞診を施行したところ、背景は出血と壊死が見られ、小型細胞の核クロマチンは疎で、N/C は低く、核小体は明瞭であった。また、核をよく観察すると核溝 (nuclear groove) が認められたため、細胞学的には顆粒膜細胞腫や Brenner 腫瘍を考え、部位的には paraganglioma 等も否定できないと報告した。

組織所見；組織学的に腫瘍は著明な壊死を伴って、未分化な明るい核を有する腫瘍細胞がシート状に認められ、明らかな sinusoidal な新生血管は認めなかったが、核分裂像が観察された。最初の報告は非上皮性腫瘍としたが、更に、10 年前の卵巣摘出標本を retrospective に検討し、今回の腹部腫瘍と比較検討した。

免疫組織化学；今回の腹部腫瘍と 10 年前の卵巣腫瘍は共に vimentin に強陽性を示し、上皮性マーカーと chromogranin A, CD99, calretinin, ER, PgR は陰性であった。synaptophysin や S-100 蛋白は腫瘍細胞の一部にその反応性は弱いものの陽性を示した。また、MIB-1 LI は 4～5% と腹部腫瘍の方が標識率が高値であった。

病理組織診断；今回の腫瘍細胞にも核溝 (nuclear groove) が認められ、10 年前の卵巣腫瘍の組織像と基本的に一致し、免疫染色においても inhibin が陽性で配列パターンも顆粒膜細胞腫を示唆する所見であったため、約 10 年を経て転移したものと考えられた。

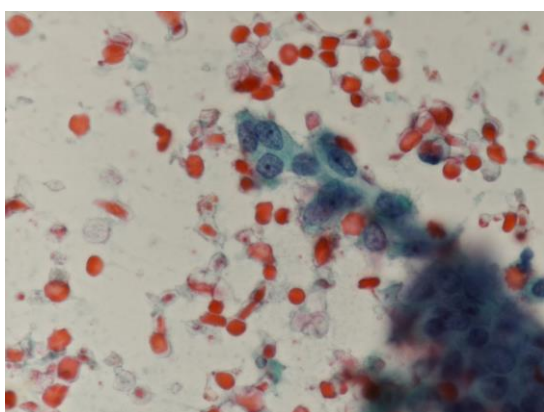
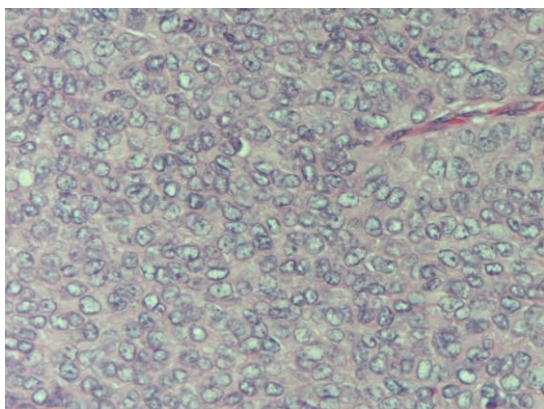
Final Pathological Diagnosis : granulosa cell tumor, metastatic

まとめ；今回、我々が経験した顆粒膜細胞腫は臨床からの情報はほとんどなく、部位あるいは形態学的にも迷った症例であったが術中という限られた時間の中で

唯一、特徴的な核の所見から細胞学的に推定することが可能であった。手術後に腫瘍を検索し、また、過去の材料も用いて総合的に判断した結果、最終病理診断に導いた事は、術中捺印細胞診の有効性が確認できたものであった。

顆粒膜細胞腫について；

- ・卵巣性索間質性腫瘍の境界悪性腫瘍に分類され、組織像の相違により成人型と若年型に分けられる。特に成人型では卵胞型、索状型、胞巣状、肉腫様びまん型等種々な型が移行、混在する事がある。通常エストロゲン産生性であるが、活性がないか稀にアンドロゲン産生性である。
- ・少数の症例は臨床的に悪性の経過を示すが、通常低悪性で、ゆっくりと進展するか、あるいは晩期再発を特徴とする。晩期再発は摘出後 4～6 年に多く見られるので長期にわたる経過観察が必要である。
- ・診断において免疫染色は有用で、一般に inhibin、vimentin、SMA は陽性で cytokeratin も陽性の事がある。最近、顆粒膜細胞腫において calretinin が 100% 陽性であることが報告されたが、分化した顆粒膜細胞腫では免疫染色不要の事が多いが、より分化の低いものについては他の腫瘍との鑑別も含めて診断に免疫染色が有用である。



症例 2

「肺印環細胞癌の一例」

国立がんセンター中央病院 臨床検査部病理・細胞検査室

澁木 康雄

【症例】60 代、女性。検診において胸部異常影が指摘され当院受診。左肺下葉切除術が行われた。

【材料】肺腫瘍捺印標本

【細胞所見】比較的にきれいな背景に、核偏在性で核の大小不同が目立ち、明瞭な核小体を有する異型細胞が結合性の弱いシート状集塊ないしは散在性に出現していた。これらの細胞の胞体内には好酸性の粘液様物質も認められた。

【組織所見】豊富な泡沫状～好酸性の胞体を有した腫瘍細胞が一部に腺管構造を形成しながら充実性に増殖している。腫瘍細胞には豊富な粘液貯留により核が偏在した **signet-ring cell** を多数認める(約 80%)。また、腫瘍辺縁を中心に核が濃染し、核小体が明瞭で粘液非産生性の立方～低円柱状の Clara 細胞に類似した腫瘍細胞の肺胞上皮置換性増殖や **micro-papillary pattern** の増殖像も認める。以上より低分化腺癌(印環細胞癌)と診断した。

【まとめ】肺腫瘍において印環細胞癌と細胞学的に鑑別が必要となるのは、粘液産生性細気管支肺胞上皮癌や転移性腫瘍(特に胃癌)であると思われるが、粘液産生性細気管支肺胞上皮癌においては、背景が粘液調を呈している場合や炎症細胞を伴うものが比較的多く、出現パターンとしては結合性の強い重積性集塊を形成し、核形の不整は認めるが核の多形性に乏しく核小体は小型で目立たないことが多いなどの点が鑑別点として挙げられると思われる。また免疫染色において肺の印環細胞癌の多くが TTF-1 や Napsin A が陽性であるのに対し、細気管支肺胞上皮癌や胃原発の印環細胞癌は陰性であることが多く、補助的指標のひとつに成り得ると思われる。

症例 3

「呼吸器細胞診」

東京厚生年金病院

田辺 一成

抄録なし

【編集後記】

桜も満開を過ぎ花吹雪が舞っています。多摩細胞診研究会の皆さん花見はしましたか？花冷えの日もあり今年は花も長い間咲いていますね。長谷部さんが亡くなられて一年が経ってしまいました。至 4 月 16 日(日曜日)に一周忌の法要が営まれました。会報 Vol.12 では長谷部さんの一周忌の特集を組みました。生前、長谷部さんと縁深い方々より思い出のお話をたくさんいただきました。ありがとうございました。写真を見ると笑顔の長谷部さんや学会発表で緊張した姿が写っています。懐かしく思われた方も多いと思います。

第 24 回多摩細胞診研究会は元 PCL JAPAN の上野さんが世話人として八王子の東京セントラルラボラトリーで開催されます。新しい社屋になり新たなスタートをきった会社です。みなさん、よろしくお願いします。上野さん、お世話になります。次回の開催については、研究会当日の幹事会で決定されます。沢山の方の出席をお待ちしています。

会報編集部より皆様にお願ひがあります。お忙しい中、スライドカンファレンス等ご協力をお願いしておりますが、症例の抄録の集まりが悪く会報編集に支障をきたしております。今後は、発表当日に抄録をお持ちくださいます様お願いします。

細胞学会での抄録雛形で構いません。写真の記載も出来ますのでご希望の方は抄録と一緒に持ちください。よろしくお願いします。

国家公務員共済組合連合会立川病院

笹井 伸哉